東京芸術大学美術館「うらめしや～冥途のみやげ」展にいってきました

こんにちは。飯島ゼミでは２０１５年７月２３日に東京芸術大学美術館を見学してきました。参加者は飯島ゼミの３・４年及び基礎演習を受講している２年生です。朝は雨が降っていたものの、正午頃にはいよいよ夏本番を感じさせるような日差しになり、駅から遠い芸術大学に通学している学生は大変だろうな、と考えていました。

美術館に入る前に腹ごしらえとして芸大音楽学部の学生食堂（通称キャッスル）で昼食を頂きました。他大の学食にお邪魔するのは今回が初めてだったので、期待を膨らませていったところ、予想以上にこぢんまりとしていました。メニューはそれほど多くはないですが、定番のカレーや予想外にエビフライもあって驚きでした。エビフライは注文を受けてから揚げているようで多少時間がかかっていましたが、学食とは思えないクオリティだったと感じています。

キャッスルで販売しているカレー

エビフライ　（ライスはついています）

さて本題の美術館に入ります。館内の撮影が禁止だったのは残念でしたが、夏の暑さを忘れさせてくれるような絵が沢山ありました。

展示室は大きく分けて二つあり、最初は主に掛け軸に描かれているお化けの絵が多く展示されていました。一般的にイメージされる、髪が長くて足が描かれていない女性のお化けから、髪の毛が抜けかけている老人のお化けまで、多彩なお化けがいました。ＢＧＭとして、よくお化け屋敷で流れている幽霊が出てくる雰囲気のものも流れていて、一層不気味な感じを際立たせていました。また、展示室の中央には蚊帳がありました。掛け軸の絵の中にも蚊帳のそばにたたずんでいる女性の絵があったことから、何か関連性があるのかと思っていたら、どうやら蚊帳の中にはお化けが入ることができないらしいです。蚊帳の中にいると安心するような、落ち着く感じがするのには、一つにはこのイメージがあるか

らなのかもしれません。

二つ目の展示室では主に怪談話の挿絵や「うらみ」によって生まれる美しさを表現した絵が多く展示されていました。絵のそばにはその絵のモチーフになった話も簡潔に書かれていて、その説明を読んでから絵を見ると、絵のモデルになった人の悲しさ、うらみ、心情などが一層分かるように感じられます。しかしやはり不気味な絵が多く、今でも思い出すと背筋が寒くなります。展示室奥には噺家による怪談話の録画も放映されていました。

美術館　外観

展示室はワンフロアだけで、私自身が絵画の知識をあまり持っていないということと、大学の美術館という事で、最初はあまり期待をしていませんでした。しかし実際に行ってみたら全くそんなことは無く、絵についての細かい説明もあったので、むしろ大いに楽しめたと感じています。ワンフロアだけの展示ではありますが、内容も非常に濃いものでした。これを期に、今まで敬遠していた美術館にも足を運んでみようかな、と考えるきっかけになった良い機会でした。

皆様も期間中にぜひ暑い夏を涼しく過ごせる機会として「うらめしや～冥途のみやげ」展をご覧になってみてください。

飯島ゼミ４年　G